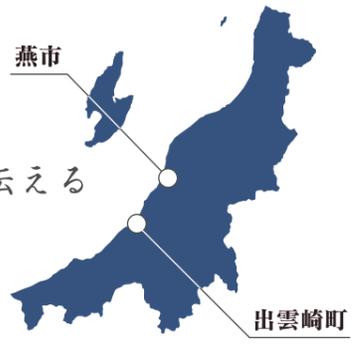


ふど

2014 Eye's

新潟 いちばん 物語

想い | つくる | 伝える



[Fuud]
2014
冬号
— 季刊 —



良寛さんを想う

Take Free
ご自由にお持ちください

早朝4時、人知れず五月の満月が国上山に沈もうとしている。このあたりの野辺で良寛さんが、こどもたちと遊んだ。こどもたちは、大人ぶらない良寛さんが大好きだった。(弥彦村、燕市周辺)

がんばろう ● ニッポン!

歴史の道 八十里越

はちじゅうりごえ
[三条市下田～福島県只見町] 文 / 榎本国男

文化の来た道 vol.08



かつて八十里越えをする旅人宿があった吉ヶ平集落の跡地に立つ吉ヶ平山荘

し寄せ、数日間で入夫を含め数千人が背後から敵兵に追われる恐怖に追いたてられるように先を急いだ。このとき河井継之助は流れ弾で足を負傷した。長岡藩総督だった継之助は全責任を負って明治元(1868)年8月4日～5日、特製の担架を使用しての逃走は困難を極めていた。道中、番屋峠で詠んだ「八十里 腰抜け 武士の 越す峠」の自嘲的な一句に、混乱の城下町を捨て会津に落ちる慚愧の念をこめた。最後まで責任を果たすべく町に残ろうとしたが叶わなかった。傷はなかなか快方せず塩沢村の漢医矢沢宗益宅に身を寄せ最期の看護を受けながら息をひきとる。享年41歳、終焉の家となった矢沢宅はそのままそっくり

越後と古陸奥(現福島県)までの交通の往来のひとつに、新潟県三条市と福島県只見町を結ぶ行程8里(32km)の山道・通称「八十里越(注1)」があった。この道については、ヒト、モノ、カネそして双方の情報など活発な物流・交易の記録がある。奥会津からはゼンマイ、蚕種(注2)、生糸、布地等。越後からは魚の干物、三条の金物、くし、かんざし等の生活物資に加えて越後ごぜ、商人、旅人や旅芸人の往来の記録があり、明治34(1901)年の記録によれば春から秋までに18,500人の往来があったという。通行期間を5月中旬から10月下旬とした場合、一日およそ120人とかなりの人数である。越後からは海のもの、会津方面からは山のもの、道幅1mほどの山道を人の背に負われ、また馬の背に載せられて行き来した。道中の深山幽谷に進む道には、落人伝説や貴族の通行を伝える話が多く残り、近世に入ると激動の歴史現場がこの峠道を通り過ぎる。天下分けめの関ヶ原の合戦で徳川側の東軍が勝利した慶長5(1600)年、越後で起きた上杉遺民一揆の戦乱では軍用道路として利用された。そして時は流れて慶応4(1868)年の戊辰戦争時、5月に長岡藩主牧野忠訓とその家族一行が雨でぬかるんだ道に難渋しながら会津をめざした。そして長岡城が2回目に落城した夏、長岡藩士と一族郎党1600人以上の人々が、初秋の長雨の中をひしめきあいながら落ち着き先を求めて行った。続いて敗軍各藩の兵士も押

高台に移築されて只見町「河井継之助記念館」として開設されている。終焉の間、戊辰戦争記録、当時国内に三門しかなかったガトリング砲、遺墨などが1、2階に分けて展示されていた。ちなみに塩沢が終焉の地なら長岡市の河井継之助記念館は、継之助の生誕の地に建設されている。中庭の古い灯籠は苔むして往事の面影をみせ黒松に寄り添っている。曲折する252号線の左右に只見川、叶津川(かのうづがわ)を眺望するが、季(とき)は初冬。葉を落とした樹々が本来の貌を露にし、明るく屹立する。新政府軍と旧幕府勢力が繰り広げた戊辰戦争戦場跡の各地には両軍兵士の墓が残されている、と地元のパンフレットにある。道路の「眼下は樹海の如し 道は天に昇る」と当時の文書は八十里越を称しているが、往時を偲べばこの道は両軍相まって戦った血染めの道だったのかもしれない。さらには、ものふの歓呼の声を聞き、一方ではひそひそと歩を進めるものふを見てきた八十里越の道だったのかと想像は膨らむ。連続と続いた戦いの中に、今を夢見ていたのだろうか……。

(注1) 八十里越……三条市と只見町を結ぶ行程8里(32km)の山道、1000m近くの鞍掛山を越える険しい峠道は1里が10里にも思われることからその名がついたといわれている。
(注2) 蚕種(さんしゅ)とは蚕の卵のこと。

編集後記

「辛い事があった時や判断に困る時、良寛さんなら、どうするかを考える」と良寛さんのふる里・出雲崎町で会った女性が言っていた。その方の生き方を良寛さんが支えていた。文化の枠に閉じ込められ気味の良寛さんより、里山で暮らしていた良寛さんを感じたくて小さな旅をした。越後に戻った当初、壮年期の人間良寛が迷い苦しむ傷ついた心を慰めたのは、他でもない越後の厳しく美しい風土だったことを実感した。新しい年を迎え、寒さはまだまだ増していく。でも厳冬が良寛さんの精神と芸術の道場だったとしたら、200年後におなじ風土で生きている私達にも伸びしろがあるはずである。ただ、それは新潟に限ったことではない。若手出身の宮澤賢治も土に還っていく農民の中に入り、風土から醸し出された世にも稀な魂の物語を遺して逝った。おなじ土地の血を引く東北の人たちも、今の一刻一刻を鍛えの時に変えているに違いない。(洪川)

ふんど 2014冬号 vol.23

企画編集 ふうど編集部
発行人 高橋春義
取材編集 洪川綾子
写 真 渡部佳則
デザイン 斎藤道司
題 字 小林 翠

発行所

株式会社 編集室 株式会社 タカヨシ
■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒110-0005 東京都台東区上野1丁目13-3 MYビル2F TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒981-0952 宮城県仙台市青葉区中山5丁目7-32 TEL (022) 303-1225 FAX (022) 303-6830
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市中区東区一丁目83 ランドマークビル501号 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / http://www.takayoshi.co.jp ■商品サイト / http://www.tk-print.jp

「ふんど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNIIGATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県立図書館、新潟県情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館
<東区>桑名病院、パティスリーカフェオルレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館 <江南区>新潟市立亀田図書館
<北区>新潟せんべい王国、ビュー福島潟 <西蒲区>カーブドット、ドメーヌ・シヨオ <秋葉区>カフェギャラリーやまほろし、川内自動車
【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新潟市生涯学習センター、新潟市民文化会館、新潟市立図書館、豊浦地区公民館
【長岡市】長岡市立中央図書館
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡
【東京都】<渋谷区>表参道・新潟館ネスパス <中央区>ブリッジにいがた

エコプレス
バインダー
針金・糊・加熱が不要な
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。

RICE
INK
この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインキで
印刷しています。

良寛さんのなみだ

東洋の哲学者とも言われる良寛さんには、いくつもの顔がある。こどもたちと遊びほうける「おらがの良寛さ」誰も真似のできない独創的な書を極めた「芸術家良寛」そして迷い苦しみながら真の仏をめぐらした「良寛禅師」出雲崎きつての名家の出身。にもかかわらず生涯、托鉢僧に身をやつす。説教をせず、いつも笑顔で、相手の立場になる行「同事」に努めた。その柔らかい徳は、いまも春風のように越後の山里に吹いている。

想い 反骨と慈愛の系譜

透けて見える時代

良寛さんのなかには、江戸末の日本と越後の哀しみがすっぽり納まっている。並外れて明晰な頭脳と澄みわたる心眼で、時代を見た良寛さんは、地べたから物申す、寡黙な時代の証言者でもあった。

佐渡島と江戸を結ぶ湊として、佐渡金山の金の荷揚げなどで栄えた出雲崎町。町の中心に大きな屋敷を構える、名門・橋屋山本家の長男として良寛さんが生まれる。山本家は南北朝時代から続く名家。代々、海上守護の石井神社の神事を司り、江戸期には町の行政全般を取り仕切る名主だった。当時、金の産出量が減少したとはいえ、年に一度、金銀が荷揚げされ、その警備や江戸への運搬作業などで町中が賑わっていた。そんな時代のなかで、なに不自由ない時を過ごし、分水の漢学にすぐれた大森子陽の私塾に遊学した。

一途で多感な性分。学問を好み、その才を発揮したが複雑な世事をこなすには繊細すぎた。遊学から戻り名主見習に就いたが、まもなく断念し出家。岡山県の円通寺で厳しい修行

の後、現世利益に走る宗教界に背を向け、宗門に属さず空庵を仮寓とし托鉢する諸国修行の道を選ぶ。反骨と慈愛を貫く生涯の始まりである。

一方、故郷では家業が傾きかけていた。父、以南は次男の由之に家督を譲り遊行の旅に出る。そして京都の桂川に身を投じ悲憤の最期を遂げた。幕藩体制に歪みが生じ、尊王思想が席卷する前夜。加えて浅間山大噴火を誘因とする大飢饉が全国を襲い、疲弊した農民の強訴や一揆が頻発した頃である。越後では二〜三年に一度起きる水害の上に冷害に見舞われ、農民は困窮していた。

こんな時代を見つづ良寛さんは家門衰退を憂い、主のいない家を守る弟や妹への想いに駆られ、父の死の二年後、故郷越後に戻る。しかし家の前を通り過ぎ、隣の寺泊・郷本の塩炊き小屋に仮寓。その後も周辺の空庵に住み、また寺の侍僧になり、一人修行に励む。寺泊、国上、和島の他、各地に転々と居を移したが、ついに雲崎に戻ることなく生家の門も潜ることはなかった。

良寛さんが見た風景

橋屋は由之の代で没落し、いまはその跡地に良寛堂が立つ。出雲崎は海

と山に狭まれ、わずかな平地の中央を北國街道が南北に抜け、両側に妻入りの家並が隙間なく続く昔懐かしい町である。長い石段がたなびく高い丘には、山本家ゆかりの石井神社が町を見守るように建ち、あたりの風景を荘厳に引き締めている。沿道の家の前には家人が丹精込めた花の鉢が置かれ、一体に物腰の柔らかい空気が漂っていた。名物の浜焼き店の若奥さんも、妻入り会館でもてなしてくれた女性も、どこか垢抜けて親切だった。日暮れが近づき、どうしても行きたかった獄門跡へと急ぐ。街道沿いの家並が途切れ、小さな橋をわたると忽然と広い空き地が現れた。その一帯だけ山が遠のき、緩い斜面と連続している。人家は一軒もない。樹々は山際に寄り、秋草が這うだけの荒涼とした大地に、一本の大きな木が天を突き抜けていた。当時の処刑は大榎の下で行われたといわれ、目の前の木が、まさにその榎だった。近づこうとしたが、どうにも足が先に進まない。ただならぬ

気配に押し戻され早々に、その場を引上げる。入口付近に大きな五輪塔とお地藏様の祠があったが、それさえ近づけない。良寛さんが仏門に入った理由のひとつに、処刑の立ち会いがあったという。来た道に戻ろうとした時、雲間から夕日がさし、風情ある町並みにいつそう陰翳をつけた。そして光を浴びる道の向こうに、良寛さんの面影がはつきり浮かんだ。郷本の塩炊き小屋があった跡にも行ってみる。すぐ裏手の小高い丘のお寺には、石段の脇でたくさんのお地藏さんが出迎える。良寛さん縁のお寺には、決まって可愛らしいお地藏さんが佇み、おっとりした時間が流れていた。与板では期せずして夕刻の時を告げる梵鐘を聴くこともできた。どこに行っても良寛さんが、いた。



長い漁具で磯見漁をする漁師。
この光景も良寛の脳裏に深く刻まれていた。



良寛が晩年を過ごした草庵がある乙子神社で行われた春祭り本祭。神事も里神楽も、水田稲作民族の心を雄弁に伝えていた。(燕市国上 平成25年5月18日)



つくる 独尊を支えた越後

乙子神社の草庵

出家して俗世間と縁を切る。続いて宗門からの離脱。この自虐的ときえ思える状況に自分を追い込んだ良寛さん。山中の草庵に独居し自己鍛錬するとは、どんな感覚なのか。六十歳から九年余、修行した国上山の乙子神社の草庵に身を置いてみる。

神社は起伏のある国上集落でいちばん高い、台地にひっそりあった。一方に山が迫り、一方を谷で切られた境内に、神殿と良寛さんが暮らした草庵を模した社務所があり、中央にイチヨウの太木が聳える。石造りの鳥居や狛犬、上の道路に続く参道など絶妙な配置。心地いい小宇宙だ。



高山植物が植えられた花壇、昼間でも灯る献灯など、隅々まで人の手が行き届いていた。さらに草庵脇の崖には、目廻りが二抱えもありそうな檜の古木が、根の一部を地表にだし必死に踏ん張っていた。すると、どこからか水音が。音の在処を訪ねると、小さな滝と溪流があった。庵のすぐ

伝えてきた芸能を引き継ぎ、元気を出しながら、やり続ける」と前向き。厳かな神事の後、いよいよ里神楽が始まった。笛太鼓の拍子にあわせ、初めて見る舞が次々に演じられる。文部省唱歌「村祭」そのままの光景がすぐ目の前にある。見物人と舞い手の境が曖昧で、途中「演者には手を触れないでください」とアナウンスが入る一幕も。見物人の年代層は幅広く、里神楽が集落に根づいていることを実感。千



楽しいね良寛さん

露する時刻が迫る中、話を伺う。「里神楽の歴史は百年ほど。祖父も父もやりました。昔は、こんな山中では娯楽が少なく、盆踊りと神楽くらいが楽しみ。冬の間は何もすることがないので、神楽の練習でもするか、ということが始まったよう



乙子神社の草庵

年。笛や太鼓もこなすベテラン。この日の演者は、六十歳から八十歳の数人。ここでも伝統芸能の後継者不足が悩みの種。それでも「長老たちが

です」。神楽歴四十

裏手。その生まれの小さな流れが集落を巡り、田んぼを潤すという。

自然の音に耳を澄ますだけで日常が遠のく。さらに密やかな音を聴き分けられるようになると、森羅万象の命とつながるような錯覚に陥った。そう、これだ。良寛さんはこの自然界のあらゆる音に慰められ、励まされて心を研いだのだ。夜の暗闇も思いのほか柔らかい。樹々の上の空は満天の星。別世界だった。

国上の里神楽

五月のある土曜日。乙子神社は何本もの幟がはためき、神殿の脇には舞殿が設えられ、ハレの日の昂りに満ちていた。年に二度の鎮守様のお祭りである。弥彦神社の末子と言われる乙子神社の歴史は古く、ゆうに千年を超えるそうだ。農作業がひと段落するこの時期に、五穀豊穣と家内安全を祈願する神事と里神楽の奉納がある。良寛さんの時代にはまだなかったが、この境内で盆踊りがあり良寛さんもここで踊ったと、国上地区の千嵐三千穂自治会長さん。千嵐さんは春祭りの運営責任者。里神楽も舞う。三ヶ月間の練習の成果を披

に親しんだことに合点がいく。そこに人の気配を感じる距離。それでいて世間と離れていられる。大好きなお酒もすぐに買いに行ける。托鉢に出られない時期など、時には人の温もりが恋しかっただろう。千嵐さんが親から聞いた話では、村なかを歩く良寛さんが多少の悪さをして、村の人は「へしかたないね」と気にかげなかったという。



けではない。良寛さんが歩いた里山は、どこか古風で奥ゆかしい気配がある。中越の寺泊・和島・分水・与板。

が繰り出す神楽で、おどけた仕草が会場を湧かせた。大黒さんと恵比寿さんの舞は定番だが、無心に楽しめた。それぞれに演じる人の芸域の高さが窺え、時間をすっかり忘れた。祭りを終えた心境を千嵐さんは、肩で息をしながら「や〜や、らっくらしたて。これから直会で飲まんば」その顔は充足感で輝いていた。もう一度見たい里神楽である。

里山に籠る古風

時代こそ違いが良寛さんの近くには、国上集落の人たちがさりげなく寄り添っていたのである。体力の衰えを感じ始めた良寛さんが、ここ

に生きる人々のつ

つましさと古風な心を愛したのかもしれない。





インフォメーション

国上乙子神社の春祭り

燕市観光協会 燕市大曲4330-1
TEL 0256-64-7630

新潟良寛会

新潟市中央区古町通4 考古堂ビル
TEL 025-229-4058 FAX 025-224-8654

国上ボランティアガイド はちのこ会

燕市観光協会 燕市大曲4330-1
TEL 0256-64-7630

読者の声 ~前号を読んで~

え！菊の花を食べるの？

秋号の「菊を食べる」は新潟出身の私には馴染みのものですが、東京出身の主人は当初「え！菊の花を食べるの？」と残酷そうな顔をしていましたが、今では大好物で喜んで秋の香を堪能しております。早速、その日の夕餉に歯ざわりの良い菊のお浸しが参上、おいしかったです！（新潟市 女性）

視覚的に秋を味わう

先号では何と言っても、色の鮮やかさに目を奪われ視覚的に秋を味わうことができました。食用菊に29種もの種類があったの知りませんでした。「菊を食べる」というタイトルもストレートで、食べない文化圏の方々にはインパクト大ですね。（長岡市 30代女性）

みんなの心のなかにいる良寛さん



良寛さん / 出家後、ついに立ち寄ることがなかった生家の跡地に良寛さんが座る。その視線は日本海と沖に浮かぶ母の故郷・佐渡島に向かう。（出雲崎町良寛堂）

伝える

慈愛のジャパンスピリット

思いやる心を広めたい

作為や権威を嫌い、己と遊びきった良寛さん。その折々に心を託した詩歌や書など、四千字ほどの作品が遺され各地で大切に保存されている。ただ古典的表現から遠のいた現代人には難解で、入口で立ち止まることが多い。そこで

良寛さんに馴染んで二人に良寛理解のポイントを聞く。

良寛さんに関する書籍を四百点近く出版し、新潟良寛会の役職も努める新潟市の柳本雄司さん。佇まいも話しぶりも、へひらがなの良寛さんだ。もともと惹かれる一句は、盗人にとり残されし窓の月

「五合庵に泥棒が忍び込んできた時、何も盗る物がないことを気の毒がり、わざわざ寝返りを打ち、ふ



五合庵でガイドする氏田公基さん

新潟の風土が生んだ良寛さんの心をもっと広めたいです。わたしたちも同じ風土のなかで生きていくのですから、共感しやすいと思います」。

新潟市中心部の上古町商店街にある「手まり庵」に立ち寄る。町なかで良寛さんの心に触れてもらおうと全国良寛会などの有志が開設。お休み処も兼ねるミニ資料館である。男性スタッフが甲斐甲斐しくお茶を淹れてくれたり、紙芝居をやってくれたり良寛モード全開の小一時間だった。

「良寛さんって何した人」ですか

こともたちから、こう聞かれたら、大人はどう答えればいいのか。国上山ボランティアガイドの氏田公基さんは、この質問にいちばん頭を悩ますという。良寛さんの人生を知れば知るほど、春風

とんを盗りやすいようにした。あとに残ったものは窓から見える月だけ、という意味です。この優しさが好きです。雨に濡れる田中の一本松を心から気の毒がったり、ノミやシラミを自分の懐で大事に育てたりもしますね。あらゆる命に慈愛をそそぐ精神性は、日本人の心のふるさとして。ノーベル文学賞作家の川端康成は、その受賞記念講演「美しい日本の私」のなかで、厳しい冬と暑い夏がある、四季のはっきりしている越後の自然と、それを味わい尽くした良寛さんの生き方に、もともと日本的なふるさとを見いだしたと世界に紹介しています。没後百八十年以上たっても研究者や慕う人が跡を断たないのは、多くの作品のなかで自分の心のふるさとを見いだし懐かしさや、慕わしさを感ずるのだと思います」。

大学時代、友人に連れられてへこの千涯の家にいき、本人から良寛の生き方や良寛への熱い想いを聞き関心を持つようになる。その後、いろいろな経験を、だんだん良寛に惹かれていった。柳本さんが良寛関係の出版を手がけてから、半世紀近くが過ぎようとしている。その間の良寛の人気ぶりに

活のために、宿場町の飯盛り女などに年季奉公に出さざるを得ない状況だった。それほど、このあたりの農村は貧しかったんです」と語気を強め、その目が光る。良寛さんはそんな幼子たちの将来を慈しみ、尚いっそう真剣にこどもたちと遊んだのだろう。

氏田さんが会長を務める国上山ボランティアガイドはちのこ会は、五十代から七十代の会員が二十二人。交代で五月から十一月の土・日曜日に乙子神社と五合庵で現地案内をしている。分水町時代の公民館活動へふるさと歴史講座をきっかけに、その受講生の有志が集まり会を結成して約十五年。月に一、二回、当番が回ってくる。

五合庵は国上山トレンギング帰りの見学者が多く、GWには一日で百人にもなった。天気や季節により開店休業状態になることも。それでも所定の時間内は待機する。ヤブ蚊



柳本雄司さん

ついて「昭和四十七年に良寛の石碑の拓本を集めたへいしぶみの良寛」を出版した時は、よく売れました。当時、良寛関係の本は年に一、二冊しか出ない頃でしたから注目されたんですね。その時から良寛会と交流ができて、いろいろな本を出してきました。没後百五十年の時は、全国良寛会が東京や大阪のデパートで良寛展をやり、大人気で見学者が押しかけ背中越しに作品を見るほど会場が賑わいました。本もよく売れました」。ちなみに相馬御風の「大愚良寛」は四十版余を重ね、良寛研究のバイブルとして一世紀を超えるロングセラーである。

「ひと昔まで新潟の代表的人物といえば、上杉謙信と良寛さんでした。小学校の教科書に取りあげられた時期もあります。へ嘘をつかないへ（思いやりへ優しさ）などが多くて難渋するという。

五合庵の説明のなかで見学者がいちばん反応するのは「長岡藩のお殿様からのスカウトを、焚くほどは風がもてくる落葉かな」という和歌でやんわり断った話。これは、薪の代わりにする落葉を風が運んでくれるので、それ以上のもは要りませんよ、この暮らしに十分満足です、という意味。この説明をすると大概の人はへへ（そうなんだ）と驚きます。それと五合庵は良寛さんのために立てられたものではなく、国上寺の万原上人の隠居処として立てられた、という話です」。氏田さんは、この知足の精神と権力に靡かない毅然良寛さんに惹かれるという。

良寛さんには日本海と里が、よく似合っていた。そして、そこには良寛さんを懐に入れたたくさんの人たちがいた。

※1 / 五合庵(ごごうあん) : 国上山にある国上寺(こくじょうじ)の敷地内に立つ。良寛四十歳からおよそ二十年の間、独居した庵として有名である。「五合」という名は万原上人に一日五合の米を扶持するという意味。 ※2 / こしの千涯(せんがい) : 明治・昭和の画家。良寛に心酔し、良寛の心にもっとも近づき、清貧のうちに世を去った異色の画家。良寛画家と称される。「千涯」の号は相馬御風から与えられた。 ※3 / 相馬御風(そうま ぎよふう) : 明治・昭和の文学者。糸魚川市出身。早稲田大学教授の職を辞し、糸魚川に帰郷後、良寛研究に打ち込む。良寛の生涯をわかりやすく「大愚良寛」の一冊で世間に広めた。